

## 彼を知り己を知れば百戦殆うからず 福和伸夫

地震学の進展は著しい。その知見に基づき、地震の長期評価が行われ、南海トラフ地震の切迫性が指摘された。一方で、現在の科学的知見では確度の高い地震の予測は困難だと判断が示された。多くの研究成果が報道発表されるなか、一般社会は困惑しているかもしれない。

南海トラフ地震は、「确实」「甚大」「限界」「衰退」で語れる。地震の発生は「确实」とされ、その被害は「甚大」で、現代社会の対応力の「限界」のため、回復が困難で国の「衰退」に繋がる可能性がある。筆者は、被災地に住む工学者として、予見されている災害を減らすために全力を尽くすのが地震に関わる人間の責務とも感じる。

過去の南海トラフ地震の犠牲者数を現在の人口に換算したり、東日本大震災の被災人口と予測被災地の人口を比較すると、国の予測死者数323,000人（直接死）は過大ではない。わが国は製造業で稼いだお金でサービス業を維持しているが、中部に集中地する中核産業が被災すれば経済的にも破綻する。しかし、国民の危機意識は希薄で、ライフラインや物流に依存しサプライチェーンで複雑に絡み合った産業構造の脆さに気づく人は少ない。

ユリウス・カエサルは「ガリア戦記」の中で「人間はものを見たり考えたりするとき、自分が好ましいと思うものや、自分がやろうと思う方向だけを見がちで、見たくないもの、都合の悪いことは見えないものである」と記している。胸に刺さる言葉である。

耐震工学の始祖の一人・佐野利器は、「然しながら、諸君、建築技術は地震現象の説明学ではない。現象理法が明でも不明でも、之に対抗するのが実技である。建築界は百年、河の清きを待つ余裕を有しない。」と述べた。同時代の物理学者・寺田寅彦は東大地震研玄関に掲げられる銘板に「本所永遠の使命とする所は地震に關する諸現象の科學的研究と直接又は間接に地震に起因する災害の豫防並に輕減方策の探求とである」と書き残した。学問の未熟さを踏まえつつ、それを活かす術を探し、少しでも災害を減らす努力が必要だと思う。

孫子の兵法「彼を知り己を知れば百戦殆うからず」を旨とし、地震ハザードと社会リスクを探索し、「君子危うきに近寄らず」と危険を回避しつつ、「転ばぬ先の杖」で備えを実践する心がけが必要である。科学的知見を災害軽減に活かすため、社会と会話し、真摯に悩み、災害軽減を実現しなければ、後世の人たちに顔向けができない。

「災い転じて福と成す」と言う。悲観的に想像し樂觀的に備え新たな時代を築きたい。



福和伸夫

〔ふくわ のぶお〕

**現職** 名古屋大学減災連携研究センター長・教授

**略歴** 名古屋大学大学院工学研究科修了、清水建設に10年間勤務の後、名古屋大学に転じ、工学部、先端技術共同研究センター、環境学研究科を経て2012年より現職、工学博士、日本地震工学会会長、地震調査研究推進本部政策委員会委員長

**研究分野** 建築耐震工学、地震工学、地域防災  
**著書** 「次の震災について本当のことを話してみよう」（時事通信社）など